

L.柴田・L.泉・L.松尾、久留米芸能祭に出演!!

りんどう
L.C通信
かわら版
平成14年
9月3日
第3号
PR委員会発行

十月二十七日(日)久留米市民会館にて、「第三十三回久留米市民芸能祭」が開催される。毎年、柴田がこれに出演しているが、今回はそれに加わり、何と、L.泉・L.松尾が初出演する。三人の演目は「梶原平三營石切(かじわらへいぞうほまれのいきり)」である。

柴田 泰公：梶原平三役(主役)
泉 元：大名役(悪役)
松尾 拓也：大名役(悪役)

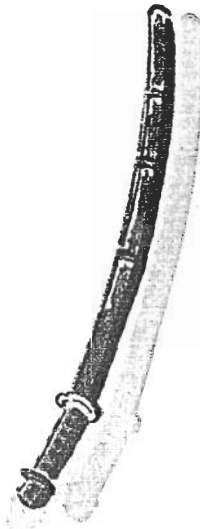
【見どころ】

「梶原平三營石切」通称「石切梶原(いしきりかじわら)」。一般に見どころと言われているのは、どれも梶原が刀を扱う場面だ。

まず、大庭に頼まれて刀の目利きをするところ。

次に罪人と六郎太夫を重ねて二つ胴に斬ろうとするところ。

最後が石の手水鉢を一刀のもとに真つ二つに斬り割ってしまうところ。やはりこの最後がクライマックスだろう。だから通称「石切梶原」と言われるわけである。



デジタルカメラ撮影歩き写真展

新しい試みとして、四季折々をデジタルカメラで撮影し、それをプリンターで印刷をした気軽な写真展を開催します。いろんな四季の題材に挑戦してみました。A3ノビ(半切サイズ)30枚ほど展示します。どうぞお気軽に、ぶら〜りと見に来て下さい。

日時 平成14年8月31日(土)～9月7日(土)
午前10時～午後6時
場所 シニア情報プラザ
久留米市六ツ門町8-20
久留米六ツ門アーケード(久留米井筒屋右隣)
tel0942(46)2600

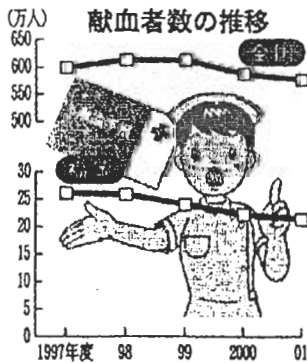
L.限充寛 久留米市西町1036-10
http://www.toq.ne.jp/~mituhiro/



【うんちく】
この主人公の梶原平三影時、実は実在の人物で、源頼朝挙兵に味方して平家討伐に功績のあった人である。しかし、その後、讒言を用いて頼朝に取り入り、義経をはじめ多くの人を失脚させたと言われている。それで頼朝の死後、謀反の罪で殺害されてしまう。史実だと、前半が善玉で後半が悪玉という御人なのである。

この作品が創られたのが江戸時代なのだが、そこで可笑しいのが江戸人は半官半民だったのだ、普通は「梶原」と言ったら敵役なのだが、この作品の梶原は最高!

梶原が颯爽とした善玉に描かれている唯一の演目なのである。



若者離れ不況追い打ち

日赤によると、全国の献血者数は二〇〇一年度が約五百七十七万人で、一九九七年より約二十万人(3.7%)減った。年代別では、十代が17.3%、二十代は15.8%それぞれ減少。五十、六十代は23.2%増えた。

福岡県の昨年度の献血者(約二十二万五千)は九七年比で18%も減少。年代別統計はないものの、九州大や福岡大など大学、短大、高専での

県内献血者 5年で2割減

福岡県赤十字血液センター(同県筑紫野市)は「異動不況で、これまで協力してくれた企業や事業所が倒産したり、リストラで献血に回く時間を惜しんだりしている影響も大きい」とみている。

このため、同センターは昨年末初めて、献血経験のある学生約三千五百人を対象にダイレクトメールを送り、携帯電話メールでのPRも検討中。

担当者は「阪神大震災時のボランティアのように、若者の熱心精神は捨てたものじゃない。何とか関心を呼び起こしたい」と話している。

献血足りない

全国的に献血者が減っている。若者の献血離れに加え、相次ぐ企業倒産、リストラで協力する企業・事業所が減ったことが背景にあるとみられ、福岡県内の献血者はこの五年間で、二割近くも落ち込んでいる。とりわけ夏場は学校、企業の長期休暇や、暑さで体調を崩す人の増加などで例年献血者が激減するため、日本赤十字社は、若者にダイレクトメールを送って、協力を呼びかけるなど献血確保に懸命だ。

献血者(昨年度五千九百二十一人)は、この三年間で14.8%減。若者の減少傾向は顕著だ。

また、全国的に昨年七月の献血者数は、最近五年間の七月実績の中で自立的に少なく、日本赤十字社は「これといった理由が見当たらない」と困惑。

犬声独語

やっと華興訪問の日程がきまってきた様である。と云ってもこればかりは飛行機に乗るまではどうなるか判らない。

▼台湾は世界でも有数の近代国家なのに、まだまだ古い中国の悪い習慣が抜けないところが残っている。おもしろい国である。今年姉妹締結三十周年に当たると云ふことで訪台される人達は歓迎を受けられることだろう。▼国交のない日本と台湾、今から三十年前のことと云いながら日本も台湾に理不尽なことをしてしまつたものだ。台湾を棄てて中国と国交を開いたものの今日中国と我が国の関係は決して良好な状態とは云へない。随分と中国に日本もナメられたものだ。こんな日中間係を台湾の人達はどうに視ているのだろうか。一度華興の人に訊いてみたいものである。▼そんな時代背景を経ながら三十年。我々もいろいろと華興の交流が一度も欠けることなく今日まで続いてきたことは特筆すべきものである。人情日々疎しく云ふけれど国や民族の異うものが「ライオンズ」という旗の下に交流を続けていくことに我々は誇りを抱かなければならない。

